猟師と糸くり婆

これは、今の曲渕ダムの近くでのお話し。
昔から、あのあたりは、狩りに出かけると、サル、キツネ、タヌキ、イノシシ、ウサギなど、
色々な動物がよくとれ、猟師の腕の見せ所であったそうな。
そんな山で、いつからか猟師たちの間には、こんな噂がたちはじめた。
「林ん中に老婆の姿をした化け物がおるらしいばい。」
噂が広まるにつれ、猟師たちは恐がり、明るいうちに帰るようになっておった。
ある晩、猟の名人・作兵衛が化け物を退治しようと一人で山に入っていった。
この作兵衛、肝っ玉が大きく、鉄砲名人で百発百中、
もう何十年も獲物を打ちそこなったことがないほどの腕前だったそうな。
作兵衛が山に入っていくと、真っ暗な中に「ボー」っと明るいところがあった。
「はて、あんなところに家があったかいな？」
作兵衛は不思議に思って近づいてみた。すると、
白髪が伸びきった老婆がロウソクの火のそばで糸車を回す姿が見えた。
「出たな化け物！」作兵衛は銃口を向けた。そして、老婆の心臓めがけて一発撃った。
「ズドン！」「よし、やったぞ！」ずばり命中した手応えがあった。
ところがなんと老婆はまったく変わらず、糸をくりながら作兵衛を見てニカニカ笑っておるではないか。
「おかしいぞ？」続いてもう一発！でも結果は同じ。三発目、四発目…とうとう十発！
タマを全部撃っても老婆は倒れるどころか、あの不気味な笑みを浮かべておった。
そしてむくっと立ち上がり、作兵衛の方へ歩き出した。
「おい、もうタマはなかとやろう、ではこちらから行くぞ！」
さすがの作兵衛も背筋がゾーッと寒くなり、村へ逃げ帰った。
翌日、作兵衛は村人たちに昨日の話をした。
「なんべん考えても訳の分からん。どげんしたらよかっちゃろうか。」
すると、ある村人が言った。
「山ん中のばけものを撃つ時は、ばけものじゃなく、そばのろうそくの火をねらうといいて聞いたばい。」
その夜、作兵衛は鉄砲を肩に、もう一度山へと向かった。
老婆は糸車を回しながら「ヒッヒッヒッ、いくら撃っても無駄じゃぞ」と作兵衛を見てニカニカ笑った。
作兵衛は、今度はロウソクの火の芯をよーくねらって撃った。
「ズドン！」「ギャー」
今まで聞いたことの無いようなすさまじい叫び声が、山に響き渡り、
そして辺りは静かな暗闇の世界になった。

翌朝早く、作兵衛は数人の村人たちとその場所に行ってみた。すると、
年老いた大タヌキが腹を打ち抜かれて死んでおったそうな。